宗教勧誘　中高生にも

松本サリン事件20年

社会とのあつれきを抱えた宗教団体や関連組織が、素性を隠したり、あいまいにしたりしたまま若者の勧誘を続けている。オウム真理教による松本サリン事件から27日で20年。そうした事件の記憶が風化する中、教育者は試行錯誤している。

サークル装い素性隠す

東京都の女性(21)は高校時代に、駅で大学生から「バレーボール好き？　一緒にやらない」と声をかけられた。有名大の学生と高校生のサークルだという。スポーツをするうち、礼拝に誘われるようになった。偽装勧誘が問題視される団体だった。「先輩や仲間がいて、いろんなことが学べそうだったからカルトであることは気にならなかった」。やがて中高生を勧誘するよう言われ、実行した。

団体を離れた今、振り返る。「家庭や学校の居心地が悪く、友だち関係に違和感がある人は仲間が欲しくなる。社会が変わらないと入信は減らない」

2009年に発足し、約170校が参加する「全国カルト対策大学ネットワーク」によると、勧誘のターゲットは近年、中高生まで広がっている。

東京都の恵泉女学園高校は昨年から、勧誘の手口などを学ぶ講演会を3年生向けに始めた。講師を務めた川島堅二・恵泉女学園大学長は「国立大や有名私大のカルト対策が進み、宗教色のないサークルを装って中堅私大の学生や高校生を誘う例が増えている。3カ月以内の離脱が大切」と話す。

オウムからは「アレフ」と「ひかりの輪」が派生した。公安調査庁によると、大学構内でウオーキングサークルなどを装った勧誘活動も行い、1997年に千人ほどだった国内信徒数が、昨年は約1650人に。特に20代が急増しているという。

千葉大の構内には、この看板がいくつも置かれている＝磯村写す

「アレフ」「ひかりの輪」低い認知度

国学院大の井上順孝教授（宗教社会学）らが一昨年、30大学の約4千人の学生に行った意識調査では、オウムが地下鉄サリン事件を起こしたことは89％が知っていたが、アレフは41％、ひかりの輪は30％しか知らなかった。

「霊感商法」とのかかわりが社会問題化した世界基督教統一神霊協会（統一教会）。ある中堅幹部は「大学生は教会内であれ社会の中であれ、将来のリーダーになっていく。大事な存在だ」と勧誘の意義を語る。

統一教会と連携する学生組織「原理研究会」を統括するワールドカープ・ジャパンによると、原理研究会は今も28大学4地域を拠点に活動中。ブログに「地域や社会に貢献できるリーダーになる」「人材育成サークル」と記しているところもある。

関係者は「ボランティアのサークルと思った学生から、後で『違うじゃないか』と言われたこともある」と認める。「（勧誘の実態まで）全部把握しているかというと、大学ごとに自主的にやっている面があるので…。コンプライアンス上の問題があれば注意する」と話す。

北海道大の櫻井義秀教授（宗教社会学）は学校側の対策の重要性を強調する一方、行き過ぎも懸念。西日本の大学が「学内での勧誘は認めない」と定め、違反した学生の名を掲示板で公開した例を挙げ、「どんな宗教団体にも信教の自由や布教の自由はある。問題は、相手をだまそうとする布教の仕方だ。ここを間違えると裁判で争う場合、教育機関側にも非があると認定されかねない。慎重に対応すべきだ」という。（磯村健太郎）

■子どもにこんな様子があったら注意
○決まった曜日の夜に遅く帰宅する
○部屋にこもる時間が増えた
○知らない友だち、特に年上の子の名前が出てくる
○テレビのお笑い番組を見なくなるなど、急にまじめになった
○夕食を仲間と食べることが頻繁になり、泊まりがけの合宿に参加したいと言い出す
○部屋から何かを唱えている声が聞こえる
（「全国カルト対策大学ネットワーク」の川島堅二氏による保護者向け警鐘ポイント）